

未 黒 野

す
ぐ
ろ
の

8月号
(通巻792号)

入院記

小川玉泉

短夜やナースは靴の音を秘め
朝ごとに替ふる病衣や夏めきぬ
走り梅雨病廊点す正六時
病窓をすかしぬ朝の風薫る

喬松のみじろぎもせず夏霞
語尾のばすナースの声や梅雨兆す
明易き病廊誰の杖の音
遠雷やりハビリ終へて車椅子
床に落ち音の涼しき空ボトル
夕焼に染まりぬ壁のぼら模様
梅雨めくやカレーうどんに杉の箸
厚きまま移ろふ雲や水木咲く

卯波立つ

松本三千夫

石楠花や水車の砕く日のひかり
東屋の足下鯉ゆく薫風裡
アールデコの家具売る店や薔薇活けて
プリンセスミチコてふ薔薇紅を濃く
犬の餌も買物メモに青あらし
卯波立つ根無雲より白く立つ
寺門出づる尼僧へ茅花流しかな
校庭に続く山あり青葉闇
潜水艦見ゆる駅舎や夏燕
老鶯や網目模様にパン焼けて
ほととぎす月な欠けそと啼きにけり
御用邸の黒松林卯波立つ

甲矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）

初夏

清海信子

山桃の花やかぎろふ定置網
波の穂の立ちあがる崖遅桜
野遊びやうかれ雀もうち交じり
藤の雨濃くゆるやかに大雫
チューリップ黄は黄に閉じて明日を待つ
人の才眩しみてをり聖五月
飴細工の鯉に紅さし子供の日
皮脱ぎてこれより竹の丈くらべ
夜もなほ茅花は絮を飛ばしをり
初夏の風を自在に唐楓

河鹿笛

黒滝志麻子

亀甲に組む石畳柳絮飛ぶ
春惜しむ憩ふに太き木の根っこ
伐り口に滲む樹液や春深む
葉桜や湖のほとりに舟干され
波立てず瑠璃拵げたり夏の鴨
夏きざす風総身に池めぐる
老鶯や朝茜濃き杣の村
園内の薔薇や一万本の空
雨樋に家紋のありぬ朴の花
村つなぐ一本道や河鹿笛



乙矢集

配列は音順（当月巻頭作家は
次号は末尾になり以下同じ）
太字は推薦句

葉 桜 吉田きみえ

卯 月 潮 安斎久英

連翹の明りや雨の由比ヶ浜
大寺のそのふところの桜かな
葉桜や社への道幾曲り
見なれたる裏山靄ひ春しぐれ
灯を消すや窓に泛べる春の月
代々の村のよろづ屋燕の子
余花の雨新しき傘下ろしけり

つつじ映ゆ鉄幹晶子比翼塚
頁繰る毎に睡魔や菜種梅雨
傘雨忌や潮の香容るるカフエテラス
Z 旗の謂れ諾ふ卯月潮
潮打たる鮎やまなこに水の色
浪子不動へ標の許の夏蓬
老鶯や禅尼の墓の肩欠けて



麦 秋

石黒興平

竹皮を脱ぐ

岡野里子

人の皆笑顔なりけり花万朶
石庭や無心になれぬ花の昼
晚鐘の餅に散れる桜かな
リラ冷えや煉瓦舗装の坂の道
飛石を色取り桜蔭降り
麦秋の風の中なる牛舎かな
ビル風や向き定まらぬ鯉幟

源平てふ咲き分けの桃日に競ひ
踏みしめて足裏に弾む春の芝
城址の真昼の静寂花吹雪
山吹草群れて空壕ふくらめり
曲がりては正しては竹皮を脱ぐ
せせらぎの風の触れゆくえごの花
四阿を風吹き抜けて青芒

八十八夜

岡田史女

りんご咲く

小倉正穂

むさし野の一隅群るつくしんぼ
山吹草空壕おほひ尽したる
荷風忌の空風船の放たれて
八十八夜えり足剃つてもらひけり
おおいなる立夏の月や酒を買ふ
のぼり来てまた坂のぼる花空木
薔薇園め白きベンチや人を待つ

春灯や食ぶるに惜しき京干菓子
父よりも母恋ふ都忘れ咲き
寡黙なる村饒舌にりんご咲く
五月来る鷗や海に身を染めて
筍の皮はぐ野良着脱がすごと
無色なる日々や新茶の薄みどり
高ぶらず氏神様の牡丹かな

青炎集

小川玉泉選



横浜 戸田澄子

横浜 河合とき

草笛の音にならねど楽しめり
ひさびさに白のブラウス街薄暑
つばめの巣ふたつ新車の展示場
白牡丹無疵のままに崩れけり
子の帰り遅くなるらし氷雨降る
日食の余韻長かり新茶汲む

楠に風の道あり匂鳥
留守電に残る友の訃さくらの夜
晩学の眼鏡拭ふや目借時
傘雨忌や雨に打たるる白牡丹
シャガールの墨絵の女聖五月
五月来る潮目定かに相模湾

横浜 小田嶋野笛

横浜 前川美智子

何億の花びらを踏み靖国へ
彼は逝き彼女も逝きぬ花は葉に
海棠のいまだ睡れる昼の雨
リラの風切つて鞭打つ女騎手
鯉のぼり次の風まで懸垂す
花の冷夫平熱といふ平和

百鳥の格天井や春深し
抜け道の垣や乱るる郁子の花
房のまま落ちて色濃き八重桜
たんぼばや日の照りかへる里の道
藪陰の石の仏や蝮蛇草
白山吹はらりと落ちぬ苔の上

栗原 千葉恵美子

震災の海沿ひの町つつじ燃ゆ
この家の花菜明りに嬰児^や眠る
セシウムの多き春子やまた捨てて
白き花咲きし木苺茶花とす
母の日や孫より届く小さき荷
風薫る鏡の中の皺ふえて

横浜 青木由芙

切り岸の蓮華つつじや瀬を染めて
芍薬の山家の庭に咲き誇り
鯉の口の揺らして過ぎぬ蓮浮葉
溪谷を吹き上ぐる風藤の花
鐘楼をめぐる竹林ほととぎす
牡丹の蕊の光や雨雫

新宿 稲垣佳子

絶え間なき落花の中の静寂かな
公園の暮色をまとひ雪柳
境内の一隅紅し落椿
雨に濡れ凜と寺領の白椿
吉報の風運び込み初つばめ
せせらぎのいよよ高まり春惜しむ

横浜 新堀満寿美

首傾げ休むクレーンみどりの日
重さうに廻る水車や雪解水
ひとしきり飛天のごとき花吹雪
爛漫の桜の間空青き
山気満ち三つ葉躑躅の色深し
ウインドーに写る猫背や夏きざす

横浜 上月智子

少年の道草誘ひ燕の巢
桜葉降るや蜜吸ふ雀二羽
丁字路を曲がりつつじの道となる
白バイの定期巡回葱坊主
定年と友の便りや鉄線花
引き売りや茹で筍の山積み

千葉 岡井マズミ

登校の子らの声聞く朝寝かな
街路樹の濃淡すでに立夏かな
夕べには植田となりて吹かれをり
地下出でし車中へ日矢の若葉色
走り根の太きを隠し椎落葉
間伐の森に日の斑や踳群るる

耕 土 集

松本三千夫選



金縷梅の咲き満ち日暮押し戻す 横浜 山本 茂子

晩学のわれにエールや木五倍子ゆれ

小道具の如く鎮座や春炬燵

忙しさも幸せのうち聖五月

鏡台にコロンの小瓶夕薄暑

花吹雪木歩の句碑を終に見ず

金柑の残る一樹や風光る

子育ての川面一閃夏つばめ

大き葉の影にちんまり青き枇杷

一日を誰とも会はずかたつむり

草加 泉 和美

山々の抱く秩父や春惜しむ

せせらぎと合唱のごと蛙鳴く

母の日の母である子とひと日かな

柿若葉透きくる風の眩しくて

萌えたてる楓の若葉鳶の笛

荒井 貞子

町川に瀬あり淵あり花筏

捨てがたき柳行李や昭和の日

校庭に隣る菜畑の穀雨かな

花蜜柑匂ふ闇より波の音

行楽の列車の間近代田搔く

横浜 斉藤マキ子

切株に腰をおろして春惜しむ

水温む声かけて稚魚放流す

春塵や古本市に本搜す

白妙の嶺を遠くの端午かな

篠の子の濡れ新聞をまとひをり

新潟 太田チエ子

滑り台の子等の歓声花吹雪

母の忌やはらから集ふ暮の春

春愁や伝言メモは仮名ばかり

老鶯や木漏れ日揺るる峠道

色鯉の四五匹うねる春の水

和泉 道草